

中国の政党と軍隊

伊原沢周

はじめに

近代民主政治の特徴の一つは政党政治である。政党政治とは、政党が政権を掌握し、政治を運営して行くことである。もし政治運営が行きまったら、他の政党に政権を交代するのが、政党政治の一般的現象である。しかし、複数政党の力関係を相互に牽制しなければ、一党独裁の政治がよく出現して来る。

中国における最初の近代的政党はいうまでもなく、中国々民党である。

一八九四年十一月二十四日、近代中国革命の指導者である孫文は、清朝政府を打倒し、民主共和政治を樹立するため、ハワイのホノルルで興中会を創設した。これは政党というよりは、むしろ秘密結社であった。しかし、その後、興中会↓中国同盟会(一九〇五年)↓国民党(一

九二年)↓中華革命党(一九一四年)↓中国々民党(一九一九年)とあい次いで改組、改名していった。それにしても、その党綱領と革命の目的は、終始一貫していた。すなわち孫文の民族・民権・民生という三民主義に基づき、自由民主の新しい中国を建設しようとしたことである。

しかし、一九二二年七月、コミンテルンの代表マリーソン(Maring G.)とプロフィンテルンの代表ニコルスキー(Nikolsky)の援助の下に、中国共産党が上海で創立された。マルクス主義に基づいた同党は、プロレタリア革命を行い、プロレタリア独裁を樹立し、共産主義社会を建設しようとしたのである。

中国々民党と中国共産党とは、その党綱領に食い違いがあるが、ともに旧中国を改造し、新しく、豊かな国を樹立しようとする目標は、一致していた。一九二一年以後、中国政治を左右できた政党は、この二つの政党しかなかった。換言すれば、近現代中国史の発展を推し進めた主軸は、この国共両党のほかにない。

国共両党が主導的地位を保つことができたのは、明確な党綱領、厳密な党組織および戦闘的な革命精神によったものであるのは、いうまでもないが、より重要なのは、

軍事力を持っていたことである。

本論は、国共両党が、なぜ軍隊を保有せざるを得なかったのか、また、軍隊をとまなう、民主政党政治の推進というものが、一体、どうやって行われたか、などの諸問題をとりあげて検討しておきたい。

一 党軍創設の背景

一九二二年一月一日、南京で中華民国の臨時大總統に就任した孫文は、革命を成功させるため、強大な軍事力を持っていた軍閥の袁世凱に總統の地位を譲った。同年三月十日、北京で總統に就任した袁は、中華民国政府を南京から北京に移転させ、独裁政治を強化しようとした。しかし、当時国会選挙の結果は、国民党が衆参両院の絶対多数の議席を占め、袁に傾いた共和、民主、統一諸党派はいずれも惨敗した。これにおそれをなした袁は、殺し屋を買収して国民党の実力者宋教仁を暗殺させた。この事件に憤慨した孫文は反袁闘争の旗を掲げて、いわゆる第二次革命を行った。しかし、袁の絶対優勢の兵力の下、国民党の反袁運動は、急速に鎮圧されてしまった。

一九一三年八月、孫文は再び日本に亡命した。

一九一六年六月、袁が病死すると、北京政府は、袁の部下である安徽派の軍閥段祺瑞、直隸派の軍閥馮国璋・曹錕・吳佩孚、および奉天派の軍閥張作霖らに相前後して支配された。三派の勢力争いは、熾烈をきわめ、北中国の不安と混乱が頂点に達した。

他方、孫文は、段祺瑞らの軍閥に対抗するため、一九一七年九月に広州で護法軍政府を樹立し、大元帥に就任した。中国における南北両政府の分裂状態が、この時から始まった。やがて孫文は、広西省軍閥の陸榮廷らに排斥され、大元帥を辞任して上海に帰った。

しかし、一九二〇年十一月、広東省革命軍の陳炯明・許崇智らが、陸榮廷の軍を広東から追い出したので、孫文は広州で護法軍政府を再建した。翌年五月、護法軍政府を中華民国政府に改組し、非常大總統に就任した孫は、陳炯明を陸軍部長、李烈鈞を参謀長に任命した。それと同時に、陳・李らに命じて陸榮廷を徹底的に討伐させた。やがて陸は敗走し、広西省の要地である桂林、梧州がある。次に李烈鈞らの軍に占領された。一九二一年十二月四日、桂林に到着した孫は、同地で北伐大本営を設け、数万の軍隊を集めると同時に、北方の段祺瑞・張作霖と結託して、揚子江中流地域を根城にした吳佩孚の軍を一

掃しようとした。しかし、呉佩孚との関係が深い陳炯明が反対したので、この北伐計画が中止された。その後、孫・陳の間に溝が深くなり、翌年六月十六日、陳が突然反乱を起し、広州観音山の総統府にいた孫文を急襲した。命からがら脱出した孫は、観音山附近の白鵝潭に停泊した軍艦永豊号に避難し、なお窮地に追い込まれたが、その時、上海から広州までかけつけてきた蔣介石が、永豊艦上の孫総統を保護しながら、総統府の守衛隊と軍艦を指揮して陳の反乱軍と交戦した。この戦役によって蔣の軍事的才能と忠誠心が、孫に認められ、孫・蔣間の信頼関係が成り立ったと考えられる。¹⁾

陳の反乱軍との交戦は五十日以上に及んだが、最後に、援軍の望みを断った孫文は蔣を連れて同年八月九日広州を離れ、香港へ向かった。

陳炯明の反乱が、孫文に与えた打撃は、きわめてひどかった。従来、みずからの部隊を持っていなかった孫は、革命戦争に際して、ほとんど軍閥を利用して敵対する軍閥と戦かわせたが、結局、どれも失敗に終わった。陳炯明の反乱が、その一つの例である。

前述のごとく、一九二二年十二月四日、桂林に着いた孫文は、同地で大本営を設け、軍閥呉佩孚の討伐を準備

した。同月二十三日、コミンテルン代表マーリンが張太雷の案内で桂林に到着、孫に会見を申し込んだ。マーリンは同地に九日間滞在し、孫と三回にわたって会談し、(一)、労農の政党を樹立すること、および(二)、士官学校を設け、武装革命を推進することを進言した。²⁾ ことに後者は、孫の心を動かしたと見られる。

陳炯明反乱後、上海に戻った孫文は、一九二二年八月二十五日、上海でマーリンと再会した。その時、マーリンは、コミンテルンがすでに中国共産党を中国々民党に加入させ、国民党の主義と革命の目標を実現するために戦うことを命じた、というのに対して、孫文は、これはなかなか結構だ、としている。³⁾ この会談は、後にソビエト・ロシアの代表ヨッフエ (Joffe, A. A.) と孫文との会談への布石となったと見られる。マーリンの意見によってコミンテルン執行委員会は、一九二三年一月十二日、中国共産党と中国々民党との関係についての決議案を通過した。その主な要点は、(一)、国民党は中国における唯一の民族革命集団である、(二)、国民党と若い中国共産党との合作は必要である、しかし、(三)、中国共産党はみずからの独立性とプロレタリア革命を捨ててはならないというものである。⁴⁾ この原則に基づき、一九二三年一

月十七日に北京から上海に着いたヨッフエは、孫文と会談した。ついで同月二十六日、「孫文・ヨッフエ共同宣言」を発表した。その要点は、(一)、孫が、共産組織・ソビエト制度は、中国にふさわしくないと考えることに對して、ヨッフエが、それに同意している。(二)、孫が、中国に最も重要なのは、民国統一・国家独立の達成だと主張するのに対して、ヨッフエは、中国は、ソ連の最高の同情と援助を得るはずだと表明していることである。(5)そこで、孫は、ロシア・ソビエトの財源・武器の援助と顧問の派遣をヨッフエに依頼した。中・ソ両国の革命の連帯が、ついに成立するに至ったのである。

その頃、陳炯明の反乱軍が広州から敗退した。孫文は三度び広州へ赴き、大元帥府を設け、大元帥に就任した。時は一九二三年二月二十一日であった。やがて陸海軍大元帥大本營が成立し、蒋介石が大元帥行營參謀長に任命された。そして「孫文・ヨッフエ共同宣言」によって「孫(文)逸仙博士代表團」がソ連に派遣されることになり、その團長として、蒋介石がその任に當った。なぜなら、訪ソの主な目的は、ソ連共産党の赤軍の組織とその長所を視察し、中国々民党の士官学校創設、党の部隊育成などを準備するためだったからである。

二 黄埔軍官学校の成立

「孫逸仙博士代表團」の成員は、蒋介石のほか、團員は沈定一、張太雷、王登雲の三人であるが、共産黨員は張太雷のみで、他の二人は、國民黨員である。蔣は出発前の八月五日に上海でマーリンに会見し、ソ連訪問のスケジュールを打ち合せた後、同月十六日、汽船「神戸丸」で上海を離れ、大連から鉄道でモスクワへと赴いた。同年十二月十五日、ソ連から上海に帰るまでの、ソ連滞在は、三カ月以上にわたった。この期間中に蔣は、まずソ連共産党本部を訪ね、中央委員会の書記 Rudzutak と会い、ロシア革命の経過と建党的状況を聞いた。(6)九月九日、ソ連赤軍の首脳である Skliansky, E. M. と Kamenev, S. S. と會談し、ソ連から中国へ軍事顧問派遣の要望を申し出た。(7)ソ連の赤軍組織については、各連隊ごとに共産党から政治委員が派遣され、軍隊に常駐している。この政治委員は、隊内の思想教育を担当しながら、作戦の決定や命令の執行などに参与する。つまり、党が軍を指揮しているのである。このようなシステムは、後に蔣の黄埔軍(11土)官学校教育の参考となっただけ

でなく、国共両党の党軍創設もそれによったのである。

さて、中国共産党は、一九二三年一月のコミンテルンの「国共合作の決議案」および「孫文・ヨッフエ共同宣言」によって同年六月十二日から二十日にかけて広州で第三回全国代表大会を開いた。陳独秀、李大釗、蔡和森、張國燾、毛沢東、瞿秋白、張太雷ら三十数人が党代表として出席し、コミンテルン代表のマーリンの姿もあった。大会では、国共両党の合作決議を正式に認めた。

一九二四年一月二十日から三十日まで、中国々民党第一回全国代表大会が広州で開催された。大会の主席は孫文、両党代表の出席者は百六十五人であった。大会の最も重要な議題は、「連ソ容共政策」の確認、中国々民党の改組、国民政府組織の検討および黄埔軍官学校の創設などである。大会では中央執行委員二十四人の中に、李大釗、中央執行委員候補十七人の中に、毛沢東と張國燾らがそれぞれ選出され、国共両党の最初の合作にやっとこぎつけた。

当時、北中国における軍閥の横行が中国統一の最大の障害となっていた。孫文は、コミンテルンの助言に基づき、士官学校を創設し、将校の養成と党軍の編制に着手して軍閥を討伐しなければならないと考えた。そこで大

会で黄埔軍官学校創設案が成立し、蔣介石が同校創設の準備委員長に任命された。

黄埔軍官学校は、党立軍事学校である。したがって正式の名称は、「中国々民党陸軍々官学校」であるが、校舎は広州から東に約十キロほどの黄埔島にあったので、通称「黄埔軍官学校」と呼ばれた。開設当初は、財政困難や設備不足などにより、窮地に追い込まれて、ソ連の援助を求める以外に方法はないありさまであった。

前掲の「孫文・ヨッフエ共同宣言」によってソ連から派遣されたボロチン (Borodin, M.) が、一九二三年十月六日広州に到着し、孫文の顧問となった。当時、駐北京ソ連大使カラハン (Karakhan, L. M.) に推された彼は、孫文の厚い信頼を得、国民党の改組に手を貸しただけでなく、黄埔軍官学校の創設にも参与した。国共両党の合作期における彼の活躍は、注目に値する。

黄埔軍官学校の政治顧問となったボロチンが、あっせんしてソ連から招請した第一回目の軍事顧問団が、一九二四年一月の末に広州に到着した。やがてソ連から提供された無償資金二百万ルーブル、一丁毎に弾五百発をつけたライフル銃八千丁および軍事顧問ガリーン (Galina = Blücher Vasily K.) と数十名の軍事教官が、あゝ次

いで黄埔に着き、同軍官学校の建設が、やっと完成するに至ったのである。

一九二四年五月二日、孫文は蒋介石に黄埔軍官学校々長を正式に任命した。同年六月十六日、同校開校式に出席した孫文は、演説を行い、次のように述べている。

中国の革命は、すでに十三ヶ年を経ており、いまだ成果を得られず、民国という名はあるが、その実はない。ロシアの革命は、中国の革命より六年間遅れたにもかかわらず、輝かしい成果を収めた。われわれは、ロシアの革命に学び、革命軍を建設せざるをえない。北方軍閥連中は、ずっと以前に保定軍官学校と北京陸軍大学を設立した。その設備と財力などは、われわれよりはるかに恵まれたが、国と国民を愛することを考えず、もっぱらわいろをむさぼっている。われわれは物質条件に欠けているが、三民主義と五権憲法に従って革命を推進し、国と国民を愛している。今日から革命の事業を新たに創造し、この学校の五百人の新入生を根本として革命軍を作り始める。このような理想的な革命軍があれば、革命の目的に達成することができ、国と国民を救うこともできる。諸君にこの「救国救民」の責任を負って

革命を前進させることを心から期待している、と。⁽¹⁰⁾

このようなソ連の赤軍制度と教練法を採り入れ、黄埔軍官学校を建設したことは、孫文の一つの新しい革命の理想と期待である。この学校を重視した彼は、みずから同校の「総理」（理事長に相当する）を兼任し、また、最高の政治顧問ポロチンと軍事顧問ガーリンが孫の理想と革命のために手助けを惜しまなかった。

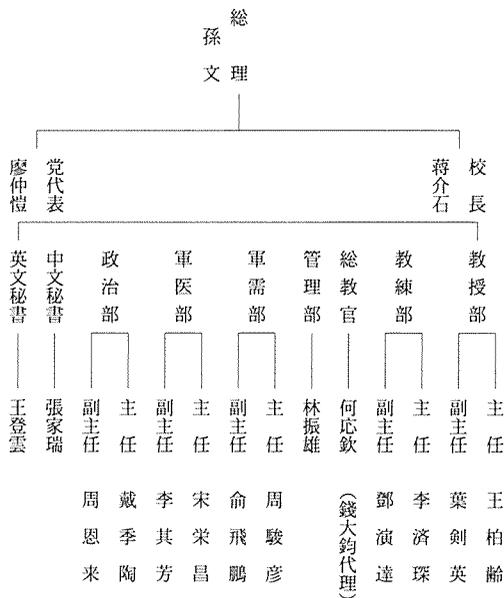
開校当時における学校本部の組織(A)表と、学生隊の組織(B)表は、次頁に掲げる。

(A)・(B)両表は開校当初の組織であったが、後に、時代に応じて改組・拡大していった。

もともと黄埔軍官学校は中国々民党の軍官学校であったが、国共両党合作の原則に沿って共産黨員が、個人の資格で国民党に入党することができた。(A)・(B)両表によれば、中国共産党の重要人物である周恩来・葉剣英らが、黄埔軍官学校の創設当初に参与し、蒋介石との同僚関係にあったので、後に、中共と蔣との交渉に際して周・葉の二人、ことに周は、つねに中共側の代表として蔣との折衝に当たった。

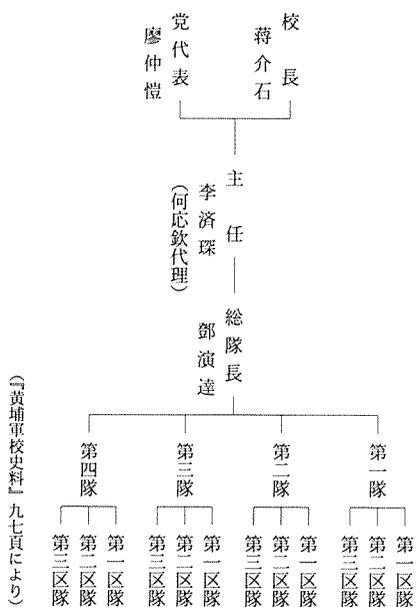
当時黄埔軍官学校政治部指導係長の王逸常によれば、一九二四年の秋、学校に着き、政治部主任に就任した周

表 (A)



恩来は、第一期学生に政治経済学の講義を担当しながら、中共の機関誌『嚮導』をもって学生にマルキシズムと孫文の「連ソ容共政策」を鼓吹した、という⁽¹⁾。また当時学校の中では、ボロチンによって結成された「青年軍人連合会」と、国民党右派の戴季陶・王柏齡らが指導した「孫文主義学会」があった。学生たちに人気があった

表 (B)



「青年軍人連合会」は、その発展も影響も「孫文主義学会」よりはるかに大きかった、と周恩来は指摘している。⁽²⁾ 一九二五年三月、孫文が北京で病死した。同年七月、国民政府が成立した。所轄のすべての部隊が、「国民革命軍」と改称され、国民政府軍事委員会の指揮下に置かれた。それと同時に、各軍の中に党代表と政治部主任を設け、ソ連の赤軍のように党をもって軍をコントロールする制度が確立した。当時、各軍の党代表や政治部主任

(黄埔軍校史料)九七頁より

の多くは、国民党に入党した中共黨員であった。これを見た蒋介石は、はなはだ不安であった。同年十一月、東征途中に、党・政・軍の要員を集め、会議を開き、席上蔣は、黄埔軍官学校を分裂する活動に歯止めをかけるため、全校・全軍の共產黨員および中共に入党した国民党々員全員の名簿を、彼に提出するように求めた。これに対して、周恩来は、このことについては、国共両党の合作関係にかかわり、中央でそれを決定すべきだ、と反論した。暫らくすると、蔣は周に、黄埔軍官学校を統一するためには、共產黨員は中共の党籍を捨てるか、さもなければ、黄埔軍官学校や国民党から退去せよ、と要求した。¹³⁾

共產党が大嫌いだだった蒋介石は、後に次のような思い出を語っている。

周知のとおり、中共は、黄埔軍官学校創設の当初から、革命の名を借りて、われわれの隊列に浸透し、潜伏してきた。彼らは、人の目をかすめてこそこそ動きまわり、挑発し、同志の離間をはたらき、デマをとばし、人を中傷した。また、陰謀や姦計を用いて、わが国民党の指導権を奪い取り、民族を売るのを唯一の目的としていたのである。¹⁴⁾

これによれば、孫文死去直後の一九二五年の秋から、国共両党間の亀裂が、すでに始まったことが、裏付けられる。

三 国共両党の決別と党軍の成立

一九二六年一月十二日、国民政府軍事委員会は、黄埔軍官学校を中央軍事政治学校と改称するとともに、蒋介石を校長に任命した。当時、国民政府主席兼党代表の汪兆銘（精衛）は、「事實上、国民政府は国民党の政治部、軍事委員会は国民党の軍事部である。いかなる軍隊や軍事学校も、すべては国民党のものであり、国民党の政策に従って革命を行う¹⁵⁾」、と強調している。この発言後の三月二十日、蒋介石は、共產黨員で海軍局長兼中山艦々長李之竜の反乱を口実に戒嚴令を布告し、広州市内にいた軍・党内の共產黨員をいっせいに逮捕した。それと同時に、ソ連領事館とソ連顧問たちの住宅も軍隊に包囲させ、監視下に置いた。これを聞いた周恩来は、ただちに蔣のところまで抗議にいったが、結局、周自身も、一日監禁された。¹⁶⁾これが、いわゆる中山艦事件である。

この事件によって国共両党の分裂が表面化した。当時、

黄埔軍官学校の学生を中心として編制された国民革命軍の第一軍々長は、蔣介石であり、党代表兼政治部主任は周恩来であった。周は蔣にせめられて第一軍からの脱退を余儀なくされ、二百数十名の共産党員も同軍から追い出された。また同時にガーリンの後任であるキサンカ(Kissanka)をはじめ十数名のソ連顧問も、国民政府に解任された。

このような重大な事件に対処するため、コミンテルン内部の意見がみだれた。トロツキー(Trotsky, L.)派は、中共は国民党から脱退し、武装暴動を起して政権を奪取するべきだと主張したのに、スターリン(Stalin, J.)らは、中共は暫らく国民党内にとどまり、徐々にみずからの勢力を拡大して行くべきだと唱えた。結局、一九二六年十月のコミンテルン第七回執行委員会でスターリンらの意見が成立した。その後中共中央は、スターリンの指令に従わなければならない⁽¹⁷⁾のである。

中山艦事件の結果から見れば、以下の諸点をあげるることができる。第一には、共産党員が国民革命軍第一軍から脱退した後、同軍は完全に国民党の軍隊となり、軍長である蔣介石は、第一軍の武力を背景にして国民党を支配することができたことである。第二には、汪兆銘が国

民政府主席の職をやめ、フランスへ向い、汪・蔣間の矛盾が、一段と厳しくなったことである。第三には、ソ連政治顧問ポロチンがスターリンの指示により蔣介石と妥協したことにより、国共両党合作の小康状態が続いたが、これは、あくまで一時的で、両党の対決を緩めることはとうてい不可能であった、との三点である。

さて、一九二六年七月九日、広東国民政府の北伐が開始された。この時、北伐の国民革命軍の総司令官は蔣介石、參謀総長は李濟琛・白崇禧、政治部主任は鄧演達、最高政治顧問はポロチン、最高軍事顧問はガーリン(蔣介石の要請により帰任)であった。北伐軍の総兵力は、八軍、約十万人であったのに、北方軍閥の呉佩孚の部隊は二十五万人、孫伝芳の部隊は二十万人、張作霖の部隊は三十五万人であった。つまり北方軍閥の総兵力は、国民革命軍の八倍以上に達していただけでなく、その装備も財力も国民革命軍よりはるかに優勢であった。それにもかかわらず、蔣は、わが北伐軍は、主義と党とを中心にし、団結を固くし、指揮を統一して敵を撃滅できるはずだ、と部下をはげました⁽¹⁸⁾。そして同年十月、湖南・湖北戦場で北伐軍は呉佩孚軍を破って武漢を占領した。それと同時に、江西戦場でも北伐軍が孫伝芳軍をせん滅し、

南昌を落した。また、福建・浙江・江蘇への北伐軍は、翌年三月、上海、南京をあい次いで占領した。残りの張作霖軍が、天津・北京諸地に巣くってはいいたが、揚子江以南の全域は、ほぼ北伐軍に制圧された。しかし、その頃から、国共両党の対決が、避けられない事態に直面してきた。

武漢占領後の一九二七年一月、国民政府は広州から武漢へと移転された。当時、武漢での国民政府は、事実上、完全にボロチンと中共に支配されていた。国民政府を南昌へと移転するべきだと唱えた蒋介石は、同月十一日南昌から武漢に着き、武漢当局を説得しようとしたが、ボロチンは、蔣に、「三年以来、われわれは苦難を共にしてすべてのことは、知っているはずである。もし農民・労働者に圧迫を加え、C・P・(中共)に反対するなら、われわれは、ことの如何にかかわらず、方法を講じてそれを打倒する⁽¹⁹⁾」と述べた。これを聞いた蔣は、はなはだ不愉快で、ただちに武漢から南昌に帰り、ボロチンを中国から追放すべきだと呼びかけた。これに対して、ボロチンも、武漢国民政府を動かして蒋介石追放の旗をあげた。

一九二七年四月十二日、国共両党分裂の決定的な要因

となった、いわゆる「四・一二上海クーデター」が起きた。この日、上海市戒嚴司令官の白崇禧は、蒋介石の命令を受け、まず中共に組織された労働者の自衛隊である「工人糾察隊」(約二千七百人)の指導者周恩来を監禁し、次に全糾察隊の武装を解除した。さらに共産党の幹部を逮捕して銃殺刑に処した。周恩来は、二十六軍の党代表である趙舒に救助され、やっと釈放された、という⁽²⁰⁾。

このクーデターによって多数の共産党員と労働者が殺害され、上海での中共の反蔣運動と労働者のストが、ついに鎮圧されたのである。

武漢国民政府を認めない蒋介石は、四・一二上海クーデター直後の四月十八日に南京で国民政府を樹立し、中華民国の正統政府として北伐の推進を継続し、また、国民党から共産党員を締め出すという「清党条例」を布告し、全国で一斉に共産党員の肅清運動を展開した。

これに対して、武漢国民政府は対応の手だてを採ったが、後手にまわり、なかならずコミンテルンから派遣された新しい代表ロイ (Roy, M.N.) とボロチンとの意見が食い違ったことで、困難が多かった。同年五月の末か、スターリンは、コミンテルンの名義で、武漢のボロチンとロイに密電を打って訓令を下した。その要旨は、(-)

農民に直接地主の土地を没収させること、(二)国民党に刷新を加え、労農代表に代わらせること、(三)二万人の共産黨員を動員し、湖北・湖南両省の五万人の労農を武装させ、信頼できる軍隊を組織せよ、というものである。

この訓令を受けたポロチンは、それを実行することは困難だと考えたが、ロイはそう思わなかった。同年六月一日、ロイは、わざわざこの訓令を武漢国民政府の支持者、また国民党左派の首領である汪兆銘に見せた。これを読んだ汪は、驚愕して、赤化を防止するため、中共と手を切り、ポロチンをはじめソ連顧問を解任するとともに、国民党から共産黨員を一掃することを決意した。⁽²²⁾

国共両党合作が完全に決裂したことを見たコミンテルンは、同年七月、中共に指令し、蘇兆徴らをはじめとするすべての共産黨員を武漢国民政府から退出させた。同月十五日、汪兆銘は、共産党との決別という「分共」政策を打ち出し、同年八月中旬に蒋介石と提携し、武漢国民政府を南京へと移転し、国民党の統一政府である南京国民政府が、ついに誕生したのである。

しかし、国民党とわかれた中共は、どうであったのか、いうまでもなく、コミンテルンの指示に従って、みずからの部隊を組織し、労農革命を目ざして、国民党と対決

しようとしたのである。

汪兆銘が「分共」政策を宣告した直後の七月二十三日、コミンテルンに派遣された代表ロミナツツ (B. Lominatzze) と、ノイマン (H. Neumann) が、武漢に到着した。彼らは、ポロチン、ロイに代わって中共を応援するため中国にやって来た。その任務は、中共中央を指導し、過去に犯した誤りのすべてを正そうとすることにあつた。⁽²³⁾ 蒋介石の南京国民政府に対決するため、彼らは武漢から南昌に向かい、周恩来とともに、南昌蜂起を画策した。

周恩来によれば、南昌蜂起に参加した部隊は、賀竜の国民革命軍第二十軍、葉挺の国民革命軍第十一軍、および朱徳の国民革命軍第九軍の一部である、という。⁽²⁴⁾ 蜂起部隊の総数は約三万人で、周恩来が全軍の党代表 (前敵委員会の最高指導者) に選ばれた。蜂起の日は、八月一日午前四時であつたので、この蜂起は八・一蜂起ともいう。この蜂起部隊は、中共が独自に持った最初の部隊である。後に、この八月一日が中共の建軍記念日に決められている。

さて、八・一蜂起部隊は、まもなく蒋介石の軍に敗れ、南昌を放棄して広東へと移動した。その後、広東で優勢な国民党軍に包囲されて大きな損害をこうむつた。

南昌蜂起に呼応し、労農を武装して秋の収穫期に湖北、湖南、江西、広東諸省で蜂起する方針を決めたのは、同年八月七日に武漢で開かれた中共中央緊急会議、いわゆる八・七会議である。この会議は、実は、ロミナツツの指導の下に行われた。中共書記陳独秀の免職、新指導者瞿秋白の選出などは、ほとんどロミナツツの意向によったものだといってもよからう。

八・七会議に出席した毛沢東は、会議後の九月末に湖南・江西の省境にある井岡山に入り、労農革命軍を編成し、秋收蜂起を起した。翌年（一九二八年）四月頃、南昌蜂起以来、各地を転戦して生き残った朱徳の軍が、井岡山に到達し、毛沢東の労農革命軍と合流し、総兵力約一万人の労農赤軍第四軍が編成された。軍長に朱徳、党代表兼軍委員会書記に毛沢東、政治部主任に陳毅が、それぞれ就任した。これが中共としての本格的な党軍であり、今日に至るまで中国人民解放軍は、この労農赤軍第四軍を母体として発展してきたものである。

四 両党間の「和」と「戦」

労農赤軍第四軍の略称は赤四軍である。その編制につ

いて、上述のように党代表の毛沢東が全軍を完全にコントロールした。この赤軍構成の主体は、農民であり、プロレタリアの党教育が徹底し、人民のための革命軍という自覚が浸透していった。そのため、士気が高まり、戦闘力も強かった。一九三〇年までに井岡山の根拠地から急速に発展し、湖南、江西、湖北、安徽、浙江、福建諸省でそれぞれのソビエト区を樹立し、その兵力は、数万以上にふくれていったのである。

一九三一年十一月、江西省瑞金で中華ソビエト共和国臨時中央政府が成立した。政府主席には毛沢東、副主席には項英・張国燾が選出された。それと同時に、中央革命軍事委員会も成立し、委員会主席には朱徳、副主席には彭徳懐・王稼祥が選ばれた。この委員会は、労農赤軍の最高統率機関である。

他方、一九二八年一月七日、南京国民政府の国民革命軍総司令官に復職した蔣介石は、国民政府軍事委員会主席を兼任し、北伐を再開した。蔣の北伐軍は、南京から北上し、同年六月八日、北京に入城した。やがて奉天軍閥張作霖の息子張学良は、国民政府を支持する声明を発表した。こうして中国は、一応、統一を達成した。この年、国民党は中央執行委員会を開き、「中華民国々民政

府組織法」を決め、一党独裁の体制を整えた。

蒋介石が北伐戦争の成果を収めたのは、黄埔軍官学校々長以来、つちかってきた強大な軍事力である。南京で国民政府を樹立する時、中央陸軍士官学校を創設し、自らが校長となった。北伐以後の蒋介石直系部隊は、いわゆる中央軍である。その装備、訓練などは、他の地方軍より優遇されただけでなく、全部隊の将校は、蔣の士官学校の卒業生でなければ採用されなかった。結局、中央軍は蔣の思いのままに指揮できる部隊となった。軍閥のように私有部隊を擁した蔣が、中共側から「新軍閥」と呼ばれたのは、そのためである。

中共が瑞金で中華ソビエト臨時中央政府を樹立するまで、蒋介石はかつて三度にわたって赤軍の根拠地に包圍作戦を行ったが、成果を挙げずに終わった。一九三三年の春、中共中央が上海から瑞金に移転し、王明（陳紹禹）・秦邦憲らは、あい次いで臨時中央政府の実権を毛沢東から奪い、コミンテルンから派遣された軍事顧問リトロフ（本名はOtto Braun、中国名は李徳）の指導の下に、蒋介石の軍との全面作戦を展開し、大きな損害をこうむった。その後、蔣の連続の包圍作戦によって撃破された赤軍は、ついに江西などの各地のソビエト区を、つぎつぎに放棄

せざるをえなかった。一九三四年十月、赤軍は中央根拠地の瑞金を捨てて、西へと脱出し、いわゆる「二万五千里の長征」の第一歩を踏み出した。

長征途上の一九三五年一月、中共中央の政治局拡大会議が、貴州省遵義で開かれた。この会議では王明・秦邦憲の党指導路線の誤り、リトロフの作戦計画の失策に厳しく批判を浴せた。ついに毛沢東の指導体制が確立してきたのである。

遵義会議後、毛沢東は長征の赤軍を率いて貴州から四川、青海、甘肅諸省へと転戦し、一九三五年十月頃、主力の第一方面軍の生き残りの当初の十分の一、わずか八千余名とともに、陝西省北部にようやくたどりついたのである。

遵義から陝西省北部への長征途上で、注目されることは、一九三五年八月一日、中共が発表した「抗日救国のために全同胞に告げる書」、すなわち「八・一宣言」である。この宣言は、実は、当時、モスクワ駐在の中共代表王明が、コミンテルン第七回代表会議の反ファシズム統一戦線結成の決議案にそって出したものである。同年十二月二十五日、中共中央は陝西省北部の瓦窯堡で開かれた政治局会議で、この「八・一宣言」を確認した。こ

の会議後の翌々二十七日、毛沢東は、「日本帝国主義に反対する戦術について」との報告を発表し、民族ブルジョア階級とあらたに統一戦線を打ち立てる可能性と重要性を提言した。⁽²⁶⁾ その主旨は八・一宣言を再強調したものであったと思われる。

八・一宣言に応えて全国抗日運動がしだいに繰り広げられた。北平（今の北京）での学生たちの「一二・九運動」に引き続いて、上海では文化人である沈鈞儒・章乃器・鄒奮韜らが、「全国各界救国連合会」を組織し、「内戦停止、一致抗日」とのスローガンをかかげた。この機に乗じて、一九三六年八月二十三日、中共中央は、国民党に於て書簡を送り、(一)、民主共和政府の樹立、(二)、孫文の連ソ容共政策の回復、(三)、全国各党派の抗日統一戦線の結成、との旨を表明した。⁽²⁷⁾ しかし、国民党側では、何らの反応も示さなかった。かえって同年十一月、沈鈞儒ら七人を逮捕、投獄した。いわゆる「抗日七君子事件」がそれである。

暫らくすると、国共両党再合作の歴史的な転換点が突然きた。これが、すなわち西安事変である。

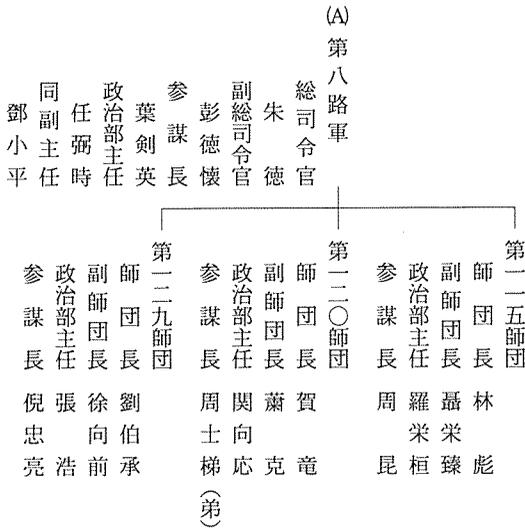
一九三六年、蒋介石の命令に従って中共陝北根拠地を包囲していた張学良の東北軍と楊虎城の十七路軍は、蔣

の直系部隊ではなく、いずれも赤軍との交戦意欲は消極的であった。しかも中共側の不戦宣伝は、かなり成果を挙げていた。毛沢東・周恩来らは、同年八月九日付と十月五日付の連名書簡を張学良に送り、内戦の停止、抗日統一戦線の結成を再三呼びかけ、張の心を動かした。⁽²⁸⁾ そこで、同年十二月十二日、張と楊は、西安での討共軍事会議に出席した蔣を監禁し、蔣に国民政府の民主化、内戦の停止、政治犯の釈放、言論・結社の自由など八項目を要求した。結局、蔣はこれらを黙認せざるをえず、やっと釈放され、南京に帰った。翌年七月七日に勃発した日中戦争をきっかけに、国共両党の抗日統一戦線の結成が、ついになったのである。同年七月十五日、中共中央は、「国共合作宣言」を発表し、(一)、三民主義を徹底的に実行する、(二)、すべての赤化運動と土地没収政策とを停止する、(三)、ソビエト政府を廃止し、民主政治を行なう、(四)、赤軍は国民革命軍と改称し、国民政府軍事委員会の統率を受ける、と表明した。⁽²⁹⁾ この宣言を受けた蔣は、国民政府軍事委員会委員長として同年八月二十二日に、中共の赤軍を国民革命軍第八路軍（第十八集團軍）に改編し、総司令官を朱徳に、副総司令官を彭徳懐にそれぞれ任命した。⁽³⁰⁾ この任命について、中共中央は同月二

十五日に開かれたいわゆる洛川会議でそれを確認するとともに、「抗日救国の十大綱領」を発表した。⁽³¹⁾ その中で、赤軍は国民革命軍に改編されたにもかかわらず、中共中

央の指導を受けなければならず、赤軍の伝統的精神と、中共の路線・政策を忘れてはならないと強調している。⁽³²⁾ また、揚子江南部各地に留まってゲリラ戦を続けてい

表 (A) 八路軍の組織および表 (B) 新四軍の組織



注 (A)表は、前掲中共中央文件選集一冊三三一頁により作表。(B)表は、前掲『中共抗日部隊發展史略』三六八〜三六九頁により作表。

た赤軍一万余を同年十月二日に、蔣介石の命令により、国民革命軍新編第四軍（新四軍）に改編し、軍長を葉挺に、副軍長を項英にそれぞれ任命した。³³こうして、国共両党の「仇を友に変える」との再合作が、名実ともに達成するに至ったのである。

一九三七年九月二十九日、毛沢東は論文「国共両党の統一戦線成立後における中国革命のさし迫った任務」の中で、中共側から提出した「抗日救国の十大綱領は、マルクス主義に合致しており、また真の革命的三民主義にも合致している」と述べ、国共両党を固く團結し、日本帝国主义を打倒すれば、中国革命の前途が明るくなるはずだ、³⁴という。

日中戦争の拡大に従って、一九三七年九月、八路军一五師団（林彪の部隊）が、山西省北部の平型関で日本の板垣師団に大きな打撃を与えた。その上、八路军や新四軍の作戦方針が、ゲリラ戦に転換し、日本軍の進撃を牽制した。

当時、中共中央が置かれていた陝西省北部の延安にいた毛沢東は、中共中央革命軍事委員の主席であり、事実上、中共の党・軍・政の最高指導者であった。周恩来は、中共中央の代表として国民政府に参加し、全面戦争展開

後、国民政府とともに武漢から重慶へ移行し、各地の中共事務所主任となって国共両党間のあっせんに勤めていた。また、国民政府軍事委員会政治部の副部長（部長は蔣の腹心陳誠）も兼任し、中共党内では、政治局副主席、革命軍事委員会副主席でもあった。抗日戦争期において、延安にいる毛と、重慶にいる周が、よく組んで蔣介石と対応した、と考えられる。

中共革命軍事委員会主席の毛沢東は、四・一二上海クーデター以後、赤軍を率いて蔣介石の軍と十年間にわたって戦った経験を活かし、すこぶる軍事才能を発揮し、八路军・新四軍を指揮して日本軍に対戦した。彼は、正規戦よりはむしろゲリラ戦の方が有利だと考え、一九三八年五月、「抗日遊撃戦争の戦略問題」との長文を発表し、「戦争の基本原則は自己を保存し敵を消滅すること」にあるので、ゲリラ戦が、正規戦に呼応できるだけでなく、多くの根拠地も樹立しようと説いている。³⁵また「持久戦について」との講演の中で、抗日戦争の長期化を唱え、そうだとすれば、日本の「経済は崩壊し、無数の戦いに疲弊し、士気はおとろえる。一方、中国側では、抗戦の潜在力が日ましに大きいたかまり、大量の革命的民衆がぞくぞく前線に赴き、自由のために戦い」そして、

つについては「日本軍を中国から駆逐することができる」と信じていた。⁽³⁶⁾

毛沢東のゲリラ戦論と持久戦論は、確かに大きな成果を収めた。抗日戦争の初期に、わずか四万人しかいなかった八路軍と新四軍は、一九四五年の日本敗戦時に、「百万の部隊、二百余万の民兵」⁽³⁷⁾の大軍に発展していた。終戦直前の一九四五年八月十三日、彼は、「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」と題する講演を、延安での幹部会議で行った。その時、「日本降服の決定的な要因はソ連の参戦である。赤軍百万の大軍が中国東北地方に入ったが、これは手向かうことのできない力である。日本帝国主義はもう戦争を続けられなくなった。中国人民の苦難にみちた抗戦はすでに勝利を収めた」といながら、「中国の大地主・大ブルジョア階級の政治的代表者である蒋介石は、周知のように、このうえもなく残忍な陰險な男である。手をこまねいて勝利を待ち、実力を保存して内戦を準備する、というのが彼の政策である」と、厳しく批判している。⁽³⁸⁾これは、国共両党の統一戦線の再分裂、内戦再開の危機を訴えたものである。

事実上、国共両党の部隊が、日本軍の占領地を接收した際に、武装衝突がもう開始した。また、蒋介石の直系

胡宗南の中央軍が、すでに中共の根拠地陝西、甘肅、寧夏辺区の関中分区にある淳化県の攻撃を始めた。

当時、米大統領ルーズベルトは国共両党の内戦再開を防ぐため、重慶駐在大使ハリー（P. J. Hurley）に命じて国共両党の和解をあっせんさせた。結局、一九四五年八月二十八日、毛沢東が延安から重慶に到着し、国共両党代表の会談が、やっと実現できた。しかし、会談の最大の難点は、両党の部隊をどう合理的に解決すべきかという問題にあった。いうまでもなく、軍隊の国家化は最も理想的なことであるが、現実に合わせて、ついに国民党側から「統一軍令」、すなわち、中共のすべての部隊を国民政府の統率下に置くべきだ、という要求を出したのに、中共側は、これに真っ向から反対した。結局、軍隊の国家化は成らず、軍隊の縮減問題となった。それにしても意見が対立していた。たとえば同年九月十五日の会談で、周恩来は、「わが方の百二十万人の部隊を十二師団まで縮減することは、全く不可能だ」と、国民党の代表張群に表明した。⁽³⁹⁾四十余日にわたったこの会談は、最後の十月十日に、双方の合意に基づく「双十協定」（重慶談判の会談紀要）を結んだ。この十二ヶ条協定の中にあり第九条で、中共の軍隊を二十四師団か、最低二千師団

に縮減し、華中、華南の中共軍を華北へと移動することになった。^⑩

この「双十協定」によって翌四六年一月十日、超党派「政治協商會議」（政協）が、重慶で開催された。^⑪同月三十一日に終了したこの会議は、「五項決議」を採決した。その中にある「軍隊の国家化」は、依然として「統一軍令」というものであった。中共から見れば、蒋介石が軍をもって独裁体制を維持しようとする意図は、全く旧態依然であった。そこで、あらゆる軍隊の戦闘行動の停止は、きわめて困難であった。この頃、中共の部隊は、東北各地で著しく活躍していた。同年四月、長春を占領したあとハルピン、チチハルへと進んだ。また新四軍も江蘇省北部に攻撃を始め、全国各地の国共両軍の戦闘が、ほぼ全面展開してきた。かつて蒋介石に改編された八路军、新四軍は、同年の九月から十月の間、正式に「中国人民解放軍」に改称された。これは、国民党との関係をきっぱり断ち、蒋介石の国民政府支配下から「解放」する決意を示したものである。^⑫

一九四六年の秋から四九年の冬まで、中国全土が中共の人民解放軍に解放された。中共に追いつめられた蒋介石は、最も頼りにできる直系の中央軍数十万をひきつれ

四九年暮にかけて大陸から台湾へと撤退したのである。

おわりに

四・一二上海クーデターによって国共両党の合作が終止符を打っただけでなく、国民党内部の分化と、中共内部のソ連留学派の台頭が、それぞれ露呈した。

中国からソ連へ脱出した国民党内の反蒋介石首領の鄧演達・宋慶齡らが、一九二七年十一月一日にモスクワで中国々民党臨時行動委員会（後に中国農工民主党と改称）の名を用いて「中国・世界の革命的民衆に対する宣言」を發表し、孫文の遺志である「連ソ容共政策」を続行しなければならぬと訴えた。^⑬この宣言は中国での反蔣闘争に大きな波紋を呼んだ。一九三〇年五月、鄧は密かに帰国し、譚平山、章伯鈞、彭沢民、黄琪翔らと共に、一つの反蔣勢力を結集し、上海で「中国々民党臨時行動委員会」を正式に創設した。ことに鄧は、かつて黄埔軍官学校学生隊の総隊長を勤めたことがあり、同校の卒業生に呼びかけ、蒋介石の直系部隊における約六千の将校が、蔣を離れて鄧のもとに、ぞくぞくと集まってきた。^⑭いうまでもなく、これは蔣に致命的打撃を与えた。一九三一

年八月十七日、上海にいた鄧は突然、蔣の秘密警察に逮捕され、南京へ送られ、同年十一月二十九日深夜、密かに殺害された。鄧の逮捕と同時に、連行されたものは、四十人以上に達した。⁽⁴⁶⁾このテロは、かつての四・一二上海クーデターと同一だといってもよいだろう。事件後の十二月十九日付上海の有力な新聞『申報』に掲載された宋慶齡の抗議文には、「国民党を滅ぼす人は、党外の敵でなく、党内の人だ」と、明らかに蔣に非難を浴びせている。翌三三年十二月、彼女は教育家蔡元培・楊杏仏らとともに、「中国民権保障同盟」を創設し、言論・出版・結社の自由を求めながら、蔣に監禁されたすべての政治犯を釈放せよ、と政府に迫った。⁽⁴⁶⁾結局、楊が暗殺され、同盟の活動も禁止された。それにしても彼女を中心とする国民党左派の反蔣勢力が、終始続いていた。一九四八年一月、国民党左派は香港で「中国々民党革命委員会」を創設し、彼女を同委員会の名誉主席に選んだ。翌年一月、毛沢東・周恩来の招きに応じた彼女は、香港から北平へ赴き、同年九月に開かれた中国人民政治協商会議（新しい政協）に出席し、中央人民政府副主席に選ばれ、毛沢東とともに人民中国の建設に力を尽したのである。

さて、中共内部の権力闘争については、すでに述べたように、四・一二上海クーデター後、党首陳独秀が免職、ソ連留学派の台頭によって左翼教条主義の路線が強行され、党の危機をもたらしたが、遵義会議を機に、毛沢東が指導権を確立したが、その危機を完全に乗り切ってはならず、依然としてコミンテルンの援助を仰がねばならなかった。したがって、蔣介石は、終始、中共は全くコミンテルンのロボットだ、と罵倒している。しかし、他の角度から見れば、国民党における独り天下だった蔣介石は、わがまま勝手にふるまうことができた。国民党の独裁体制を保つことができたのは、いうまでもなく、蔣の軍隊であった。

これに対して、中共の権力者は毛沢東であった。毛は党をもって軍を統率し、軍をもって政治を治めた。この党軍によってできた政治体制は、国民党と異なるところがない。蔣を打倒するため毛は、「軍民の一致、軍政の一致、将士の一致、全軍の一致をはからなければならず、規律違反のいかなる現象もあってはならない。わが全軍の将校は、われわれは偉大な人民解放軍であり、偉大な中国共産党の指導する軍隊であることをつねに銘記しなければならない。たえず党の指示をまもっていくか

ぎり、われわれはかならず勝利する」と解放軍を激励した。⁽⁴⁷⁾

解放軍に中国大陆から追い出された蒋介石は、一九五〇年三月一日、台北で中華民国總統として復職した。復職の直前に「今後軍事教育の方針」と題する講演を行った。その中で、一九四五年抗日戦争終了後の国民政府部隊の将校は昔の黄埔軍官学校時代の伝統的精神と道徳を失ってしまった、米軍の生活様式を見習ったが、アメリカ人の責任感や軍規を守る精神を身に付けていない、ため息をついた、という。⁽⁴⁸⁾

抗日戦争終結頃から蒋介石軍の主力部隊は、ほぼ全軍に米式装備を整えた。しかし、重慶会談に際して、中共とそのほかの民主諸党派は、国共両党の内戦を食い止めるため、国民政府に軍隊の国家化を要求した。それと同時に、アメリカ政府も、党軍の政治体制を好まず、部隊の民主化を蔣に進言した。したがって国民政府は、やむをえず部隊中の政治部を廃止し、いわゆる党化教育を止めた。

一九四九年に人民解放軍に破れた蒋介石は、台湾で部隊の党化教育を再評価し、翌五〇年、息子経国を国防部総政治部主任に任命し、党軍の再建に力を入れた。いわ

ば、黄埔軍官学校時代の赤軍編制のような制度を、再導入しようとしたのである。

周知のとおり、蔣経国は、一九二五年十月から一九三七年三月にかけてソ連へ留学、軍事・政治などを勉強した。一九二五年十二月、モスクワでの中山大学に入学してから共産黨員となった。一九二七年の四・一二上海クーデターの直後に彼は、「かつて蒋介石は、私の父親、革命の友であったが、反革命に走っている彼は、今や、私の敵となった」と罵った。⁽⁴⁹⁾ソ連留学期中の赤軍の訓練、組織、教育などについては、彼の日記「赤軍」の中に詳細に示されている。⁽⁵⁰⁾帰国後の彼は、父親の命に従って故郷浙江省奉化県に帰り、当時、監禁されていた張学良とともに、朱子学や陽明学を研究させられ、いわゆる「洗脳」教育を受けた。⁽⁵¹⁾共産黨員から国民黨員（一九四〇年六月国民党々籍取得）に変身した彼は、赤軍のことを、中共指導者の誰よりもよく知っていたに違いない。中共の党軍に対決するため、父親の中共に対する「政治作戦」というスローガンに基づき、国防部の総政治部を総政治作戦部と改名し、反共思想教育を一段と強化していった。一九六五年一月、国防部々長に就任した彼は、父親に代わって台湾全軍の統率権を握った。赤軍のよう

に、党・軍の実権をもって政治を支配し、台湾の安全を守ったのである。

一九七五年四月、蒋介石が台北で死去した。わずか三年後の一九七八年二月、蔣経国は父親の後継者として中
華民国総統に選ばれた。在任期中の彼は、中共の毛沢東
のように、よく台湾各地の農村をめぐって農民生活の実
態を調査しながら、農民と一緒に雑談をしたり、食事を
したりした。⁽⁵²⁾ 時に彼についていった人の中に、農業専門
家の李登輝がいた。

李登輝が蔣経国に与えたイメージは、政客ではなく、
学者であり、誠実な人ながら、熱心なクリスチャンだった
といわれている。⁽⁵³⁾ 一九八四年三月、総統再選の際、蔣経
国は李を副総統候補として国民党に推薦した。ついに国
民大会で、蔣は一、〇二二票、李は八七三票でそれぞれ
当選した。⁽⁵⁴⁾

一九八八年一月十三日、総統蔣経国が突然、病気で死
去した。副総統李登輝が、ただちに総統に就任した。約
半世紀にわたって台湾を統治した「蔣氏の天下」が、つ
いに終止符を打った。そして台湾出身の李登輝が、国民
党の最高指導者として台湾の独自の生活様式と政治理念
を守り、中共と対決しつつ、今日に至っている。

蔣経国死去の翌日、中共中央は、弔電を台湾国民党中
央委員会に送り、深い哀悼の意を表している。⁽⁵⁵⁾ これは、
国共両党再統一を呼びかける意味である。しかし、台湾
の現実の環境と、世代の変転などによって、今日の国民
党は、すでに台湾に土着化され、決して昔の国民党では
ない。しかも一九八七年七月十五日、台湾の民主主義運
動に対応するため、蔣経国は、しぶい顔でやっと二十八
年間の戒嚴令を解除することを宣言した。⁽⁵⁶⁾ 台湾における
一党独裁政治が、多党政治へと転換した。国民党の「絶
対主義」時代は、幕を引いたのである。

もともと、蔣氏父子は、国民党の党軍に頼って台湾を
守ることができたが、多党化された今日の台湾では、軍
隊の国家化はどうなっているか。もし国民党の党軍が、
そのまま存続すれば、軍との関係のない李登輝総統が、
蔣氏父子のように軍をコントロールできるかどうかは、
今後の課題である。先頃、李総統が再選された際に、中
共人民解放軍のミサイルの台湾近辺への発射は、演習と
いうよりむしろ兵力の誇示だと思われる。なぜなら、中
共の政權安定を守る唯一の切り札は、人民解放軍だから
である。

要するに、北伐戦争から今日に至るまでの中国歴史の

發展過程から見ると、国共両党が絶えず内戦を起こした主な原因は、党軍によったものだとはいわざるをえない。両党が党軍を維持する限り、内戦を止めるのは困難である。もし軍隊が国家化され、政党が民主化されれば、今後中国の繁栄と平和を、実現することはできるはずだと考えられる。

注

- (1) 一九二二年八月九日、孫文は、広東を離れ上海へと赴くことを各国領事に通告した。出発に先立ち、孫は艦隊の將兵に一カ月の手当を支給し、反乱軍と戦った功績に報いた。同日午後三時、孫は蔣介石、陳策らを率い、永豊艦からイギリスの砲艦「摩漢」号に乗り換え、香港に向かった。その時、孫は蔣に、「私は余生があと十年もないことを知っており、君は少なくともまだ五十年は、生きられるので、主義のために奮闘し、革命のために自重してほしい」と述べた。孫・蔣の密接な関係をこれによっても知ることができる。蔣介石著『孫大總統広州蒙難記』および一九六五年十一月十二日付、蔣の「国父百年誕辰紀念会致詞」。
- (2) 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』下冊一四〇八〜一四一三頁、中華書局、一九九一年、北京。
- (3) 同上、一四九六頁。
- (4) 中国社会科学院近代史研究所編『共產國際有關中国

- 革命的文献資料』第一輯七六〜七七頁、中国社会科学院出版社、一九八一年、北京。
- (5) 『孫中山全集』第七卷五一〜五一頁、「孫文越飛連合宣言」(一九二三年一月二六日)、中華書局、一九八五年、北京。
- (6) 蔣介石著『蘇俄在中國』(中国々民党中央委員会党史委員会編『總統蔣公思想言論集』九卷収録、民国七十三年、台北)二七〜三二頁。
- (7) 同注(2)一六六八〜一六七〇頁。C. Martin Wilbur. Sun Yat-sen: Frustrated Patriot, p. 152. Columbia University Press, 1976.
- (8) 廣東革命歴史博物館編『黃埔軍校史料』三九〜四一頁、廣東人民出版社、一九八二年。
- (9) 楊雲若・楊奎松共著『共產國際和中国革命』八七頁、上海人民出版社、一九八八年。
- (10) 同注(8)四四〜五六頁「陸軍々官学校開学演説」(孫中山)。
- (11) 同注(8)一一六〜一一七頁。
- (12) 同注(8)五九〜六三頁、周恩来「関于黃埔軍校」。
- (13) 同上。
- (14) 中華民國五三年(一九六四年)六月一六日黃埔軍官学校四十週年記念講演「黃埔の革命精神と黃埔の革命責任」(前掲『總統蔣公思想言論集』二八卷三一八〜三二七頁に収録)。
- (15) 同注(8)七四〜七八頁、汪精衛「建立中央軍事政治学校緣由」。

- (16) 中共中央文献研究室編『周恩來伝』一〇八〜一〇九頁、人民出版社、一九九〇年、北京。
- (17) 向青編著『共產國際和中国革命關係史稿』九三頁、北京大学出版社、一九八八年。
- (18) 一九二六年(民國一五年)八月一四日に長沙での講演。『革命文獻』十二輯一六四〜一六七頁収録。
- (19) 一九二七年(民國一六年)四月一八日に國民政府の南京定都を祝賀するパーティーでの講演。
- (20) 前掲周恩來伝、一三〇〜一三一頁。
- (21) Harold Isaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution*, p. 103. Palo Alto, Stanford University Press, 1961. その他、ジ・ナサン・スウェンズ著・三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』二三七〜三三八頁、講談社、一九七五年、東京。また、蔣永敬著『鮑羅廷与武漢政權』三三八〜三三九頁、伝記文学出版社、民國六一年、台北。
- (22) 一九二七年(民國十六年)一月五日に広州中山大学における汪兆銘の講演(『革命文獻』一六輯、七九〜九三頁収録)。
- (23) 同注(17)一七〜二〇頁。
- (24) 中国社会科学院現代革命史研究室編『南昌起義資料』一頁、人民出版社、一八七九年、北京。
- (25) 周国全等著『王明評伝』二六六〜二七五頁、安徽人民出版社、一九八九年、合肥。
- (26) 『毛沢東選集』第一卷一三七〜一五五頁、人民出版社、一九六六年、北京。また、この会議は、一般に「瓦窯堡會議」と呼ばれている。一九三五年十二月十七日に開かれ、一週間以上にわたって左翼路線の誤りに批判を加えた。會議に出席した中共の大部分は、毛沢東をはじめ、周恩來、張聞天、秦邦憲、劉少奇、李維漢、楊尚昆などである。
- (27) 王健民著『中国共産党史稿』(増訂本)第三編延安時代五九〜六二頁、中国図書供給社、一九七四年、香港。
- (28) 注(16)三一六〜三一七、三二六頁。また、一九三六年一月一日付、毛沢東・朱徳・周恩來らの連名書簡を蔣介石あてに送り、「仇を友に変え、ともに日本の侵略に抵抗しよう」と求めた。(注(27)王健民書六五〜六六頁)。
- (29) 同注(27)一一五〜一六頁「中共中央為公佈国共合作宣言」(一九三七年七月一日)。
- (30) 注(27)一一七頁。また、同書によれば、当時、赤軍の総数は二万である、といっているが、中共側の資料によれば、三万余という。また、四万六千の説もある(張廷貴等著『中共抗日部隊發展史略』一五〜一六頁)。
- (31) 中央档案馆編『中共中央文件選集』一冊三二四〜三四頁、中共中央党校出版社、一九九一年。
- (32) 同上、三三三頁、中央革命軍事委員會主席毛沢東、副主席朱徳・周恩來らの指示。
- (33) 日本国際問題研究所編『中国共産史資料集』第九卷三八三〜四〇四頁に収める項英「新四軍の抗戦一年來の經驗と教訓」(一九三九年一月一日)、勁草書房、一九七四年、東京。

- (34) この論文は、一九三七年一月二日付、雑誌『解放』第一巻第一八期に掲載されている。前掲中国共産党資料集第八巻五四五〜五五四頁に収録。
- (35) 『毛沢東選集』第二巻九三〜一四一頁、外文出版社、一九六八年、北京。
- (36) 同上、一四三〜二五七頁。
- (37) 『毛沢東著作選』四〇七頁、外文出版社、一九六七年、北京。
- (38) 同上、三九五〜四一七頁。
- (39) 中共重慶市委党史工作委員会等編『重慶談判紀実』二〇八頁、重慶出版社、一九八三年、重慶。
- (40) 同上、二五〇〜二五四頁「政協与中共代表会談紀要」。
- (41) 拙稿「政治協商会議と人民中国の誕生」、追手門学院大学文学部東洋文化学科『東洋文化学科年報』第九号に収録、一九九四年。
- (42) 一九四七年十月十日、毛沢東が中国人民解放軍総司令部のために起草した「中国人民解放軍宣言」には、蒋介石を打倒し全中国を解放せよ、というスローガンが提起された。この宣言は、「双十宣言」とも呼ばれており、陝西省北部の神泉堡で起草された。前掲毛沢東選集第四巻一九五〜二〇二頁に収録。
- (43) 『鄧演達文集』三三三〜三三八頁、人民出版社、北京、一九八一年。
- (44) 中国農工民主党中央党史資料研究委員会編『中国農工民主党的奮闘歷程』八三〜九四頁。中国文史出版社、一九九〇年。
- (45) 同上。
- (46) 宋慶齡は、「中国民権保障同盟の任務」との論文の中で、「同盟」とは政党でない、民間人によって組織された人権保障団体であり、政府に民権を保障すべきことを要求するのが、主な任務である、と示している。中国社会科学院近代史研究所編『中国民権保障同盟』五〜一六頁、中国社会科学出版社、一九七九年。
- (47) 同注(42)「中国人民解放軍宣言」により。
- (48) 前掲総統蔣公思想言論集二十三巻(講演)九八〜一〇一頁。
- (49) 『蔣経国自述』五九〜六〇頁、湖南出版社、一九八八年、長沙。
- (50) 同上、一二〜一八頁「紅軍」(一九二七年六月四日)。
- (51) 蔣経国著『我的父親』(正中書局出版、民国六四年、台北)一〇四頁には、「帰国後から中国の伝統的道德、政治、文化、哲学思想のすばらしさを知り、完全に父親を信じ、自ら革命的な人生観と世界観に変わった」という。
- (52) 李松林著『蔣氏父子在台湾』(中国友谊出版社、一九九三年、北京)下巻二七頁によれば、蔣経国は總統就任後、初めの四年間において農村の訪問は一九七回に数えられ、農民とともに一緒に生活した日が一五五日に達している、という。
- (53) 同上、五四頁。
- (54) 同上。
- (55) 同上、一八八頁。

一九四九年一月、平津戦役に失敗した蒋介石は、台湾を最後の反共基地にするため、当時台湾省主席の陳誠に命じ、同年五月十九日、台湾全域での戒厳令を發布させた。これによって集会、結社、言論、出版などの自由が、一律に禁止された。台湾は完全にファッショ時代に入った。蔣に反対したり、また国民党独裁を批判することは、共産党容疑者や反乱者という口実で、逮捕され、処刑された。たとえば、一九七九年十二月に起った「美麗島事件」(高雄事件)がその一例である。このような三十八年間にわたって続いたテロリズムは、史上にきわめて希有なことであるといえる。